

17. 膵シンチグラフィーの検討

第2報 膵シンチグラフィーの診断的意義

綿引 元 中野 哲
武田 功

(大垣市病・二内)

市川 秀男* 金森 勇雄*
(同・放内)

我々は、ERCP, P-S test を実施してあるもの、及び手術、剖検にて確認したものをあわせ80例について膵シンチグラフィーの診断的意義を検討した。膵シンチグラム正常例で軽度の膵障害を示す尿アマラーゼ異常例が 55% に認められ、なかに、膵癌、膵仮性のう胞が含まれていた。摂取低下例では、ERCP, P-S test とともに異常率は 50% であった。摂取不能例では全例膵疾患であったが、これは対象が限定されているため、対象から除外したもののなかには膵疾患以外の摂取不能例は存在した。次いで部分的描出または欠損例では、膵癌が主体であったが、他の疾患も相当含まれていた。これら2群の ERCP, P-S test は、ともに高い異常率を示し、膵になんらかの病変があることを示唆したが、質的診断は不可能であった。

膵疾患、特に膵癌の診断にあたり、我々は、ERCP, PTC, 血管造影等の形態学的診断法と、P-S test 等の機能的診断法を併用し、総合的に診断を進めているが、膵シンチグラフィーも、他の検査法と組合せ活用するならば、補助的診断としての意義が増すといえよう。

18. 膵頭部と膵体尾部が分離して描出される膵臓(二分膵)について

桜井 邦輝 木戸長一郎
有吉 寛 三原 修

(愛知県がんセンター)

1971 年初めから 1975 年末までの愛知県がんセンターの新患の膵シンチ 1,426 例中 41 例に二分膵を認めた。これは 2.9% にあたる。

41例の内訳は、膵炎23例、悪性腫瘍12例、膵奇

形2例、正常その他4例であって、膵炎と悪性腫瘍の症例が多い事が目立つ。悪性腫瘍12例中、膵体部癌1例、胃癌1例、悪性リンパ腫2例を除いては、膵への癌、肉腫の浸潤、圧迫を有するものはない。

二分膵41例中、UGI の施行してある 38 例を調査するに、12 例に上腸間膜動脈症候群があり、10 例に胃下垂が認められた。また、この41例には、無力体質を有する患者の症例が目立った。

上腸間膜脈は、膵の後方に存在するので、上腸間膜動脈症候群を有する症例の二分膵を、大動脈と上腸間膜動脈による狭窄により説明する事はできない。

二分膵は無力体質の人に、よく見られる事から、膵の緊張の低下に関係があると思われる。膵炎及び悪性腫瘍を有する患者に見られる二分膵は、患者の無力体質化に伴う、膵実質の緊張低下によるものと思われる。

19. Deconvolution analysis による ^{131}I -BSP 投与後の肝動態機能の検索

松田 彰 平野 忠則
前田 寿登 中川 毅
山口 信夫 田口 光雄

(三重大・放)

^{131}I -BSP 投与後の経時的 data をシンチカメラで検出し on-line computer system で処理し、短時間に肝血流及び排泄機能を測定する新しい肝胆道機関検査法を開発した。data 処理は、心領域の time-activity curve を入力とし、肝領域のそれを出力として deconvolution analysis により transfer function (以下 TF) を計算した。得られた TF は肝動脈に直接注入した時に得られる hepatogram と同一のものであると考えられる。この TF の initial height (以下 IH) 及び height over area 法により算出される mean transit time (以下 MTT) を各々肝血流分布と排泄機能を反映する parameter とした。いずれの parameter についても各単位領域毎の算出値を輝度として表示し、